



書簡



筑駒電子書籍文庫

1998b14

B14

I

吾輩は？

証拠はないが、猫ではない筈だ。取り敢えず自分は人間だとしておこう。なぜなら私は人間として括られることが多い。生まれたときから、私は人として呼ばれたり扱われたりしている。でも「人間」と呼ばれることに意味を持たないと考える私に、この人間という括りは意味のあることなのだろうか。

私は自力では、自己紹介もできない。仕方がないので、私は他人からどう言われてきたか、紹介されてきたか考えてみたのだが、思いのほか纏まらないものだ。まず生まれてから接してきた人間の数があまりに少ないことも原因だとは思う。よく話題にのぼることだが、「自己も理解できていないなら他者のことは理解できない」さらには「自己を理解するなど不可能だ」とさえ言われている。私は全ての物事に対し無理解な領域を持っているはずだ。私だけかも知れない。しかし、君も同様の考えをお持ちかも知れない。或いは、これは私だけの考えかも知れない。しかし、私自身がこう訴える以上、私は何ができるのであろうか？君にとって、私は世界との関わりを捨てたようにさえ見えると思う。でもそうではないことはすぐに君も分かるはずだ。もしそうなら、こんなものをそもそも書いていない。

- 私はまだ君を知らない。別に深い意味はなく、まずこれがどこに届いたかも知からない。読まれているかも知らない。もし私の書いた出鱈目な住所と郵便番号が実在していたなら、この迷惑な手紙は恐らくそこに偶然住んでいる君のもとに届き、君はこれを読んで混乱していることと思う。或いは、既に最初の受取人がどこかに捨てて、それを拾った誰かが君なのかも知れない。いずれにせよもしこれを読んでいる君が存在するなら、まずこの有害な書き手である私は、君に誤らねばならない。念のため言っておくと、私は怪しい商品の販売員でもなければ、宗教の勧誘員・信者でもなければ秘密結社の一員でもない。私はただの個人である。君に社会的な迷惑を

与えるようなことはしない積りだ。この紙が迷惑であると君を感じるだろう。もしそうなら別に私は燃やしてもらっても構わない。

では、何の目的で私がこの手紙を書いているか疑問に君は思うだろう。私もはっきりとしている訳ではないが、多分私は自分の表に出せない社交性をこんな方法でしか表現できなかったのではないだろうか。私の周りからは人間が、いや、すべての魂を持ったものが離れていったのか？だが、私はそのようなことについて思索するにはあまりに愚鈍だ。私は、他に誰もいないこの部屋でこの不快な計画を寂しく企て、これを読むときの君の困り果てた顔を空想する光景を夢見ることしかできない。

II

私は孤独になることが耐えられなかった。寂しさも受け入れがたいものだった。人と話すことにもそれ相応の精神的疲労が伴うものだ。私はどちらにも耐えられなかった。授業時間に代表される、「受け身」の時間の方が救いに思えた。時間をつかって、何か自分の意志を実現する（どんなに容易であっても）ことは私には不可能に近いことだ。小さな意志は他人に伝えることができず、大きな意志を持つには自分はあまりに小さかった。しかも、受動的に物事をこなす頭脳も肉体も無かった。結果として私はこんな馬鹿げた真似しかできない人間となった。社会から捨てられた哀れな人間として私を保護しようとする人々もいる。しかし、私は、自分と同じような生活をする他の人間とは異なる。私はこのような欠陥のある人間として、必然としてこうなったのだ。私は社会性を放棄した。社会性を持つための基本的な能力の向上を放棄した、と言ったほうが良いかも知れない。私が社会を捨てたのだ。いや、きっと捨てられるべく私が誕生したのだ。

III

私の得意な唯一の行動は人間観察である。特に目的はないのだ、しかし、それこそが非合理的な私の思考に最もよく馴染んだ。通常の間人は、人間観察という事に対し、忙しい日常の合間に、他人のどうでもよい些細な行動を観察し、冷静に、時には冷笑しながら、時に冷酷にみる高慢な

印象を持っている上に、実際に本人が人間観察していない時では、自分以外を自己との比較で観察し他者の感情を抑圧してまでも自己の意志を押し通そうとするものである。だから彼らにとって人間観察は冷たいものである。しかし私にとってむしろこの行為は熱意を要求されるものである。それらは好奇心を満してくれる僅かな時間である。私が知性を持ち合わせた存在として活動する時間の大部分を占める。

私は時折、街に出る。大都会ではなく、飽く迄「街」である。大都会の雑踏は、主体的に動くことを明らかに要求する。さもなければ人々からの罵倒・冷笑が待ち受けている。それらはまだ私の心を傷つけるには至らない。最も私を苦しめるのは彼らの死んだ目線を受けることだ。それらは、私のすべての失敗・欠陥を鋭く指摘する。そして私自身が発する負の雰囲気全てを私に反射するのだ！

私は街に出たのち何をしたかは基本的に覚えていない。人間を観察したかさえ怪しい。大抵近くにあるどうしようもなく淀んだ川に飛ぶ蠅たちと語り合う。特に言葉を発することも、ジェスチャーも必要ない。私は川岸に座りひたすら彼らと空間で語り合う。そうでない時でも私は定点観察を基本としている。そして何よりも私に興味を与えるのは、私を眺める人間の行動である。通常観察と言うものは上の者が下の者を見下す態度がつきものだ。しかし、この時は悪臭を放つ川のそばの不審な人間、私、を私の観察者は例外なく軽蔑している。そうに、違いない。それに対し、私も彼らを内心嗤ってやりたいと思っている。この互いに見下す関係は、時として平等であり、それを理解した私は正確な観察ができるのかも知れない。この瞬間に無造作に光を反射する物体の集合が、初めて生命を獲得する。

IV

私が朝目を覚ますと、この窓のない建物の壁から日の光が漏れている。私は今どこにいるかはよくわからない。多分どこかの山中にいるのだと思う。森の中にしては随分と明るい、不思議なことに鳥などが鳴く気配はない。風も少ない割には湿気も感じられない。

私がどうやってここに来たかは、わからない。しかし、思い当たるところが無い訳ではない。どこかを彷徨っていた。今となってはその風景すら思い返すことはできないが、こんな田舎では無かったと思う。記憶はそこで一度途切れているが、多分意識を失っていたのだろう。気付くところの椅子に座っていた。

小屋から15分も鬱蒼とした山道を歩くと細い車道と繋がっている。そこには辛うじて体勢を保つ錆びたポストがある。一か月程観察してみると、どうやら毎週同じ若い郵便配達夫が来ているようだ。ポストの中を覗いても、私以外に利用している人はいないようで、なぜ彼は毎週来ているかも不明だが、話しかける勇気もない。

私の小屋の前には大きな箱があり、三日に一度食糧が勝手に入っている。誰が入れているか確認したこともないが、きっと夜中にここを訪れているのだろう。気味の悪い話に聞こえるが、この小屋に住みつく私自身に比べれば大した問題ではないだろう。

私は今自由である。なのに、私の心は満たされてはいない。私はこの生活が本当に自分を自由にするだけの意味があるのか疑問を持っている。

V

以前の暮らしとは何も変わることは無い。虚しく部屋の中に閉じこもることしか自分には出来ない。見つめた物は皆去っていき、私の目は曇ってゆき、私以外は私から消えていく。私が求めているのは、恐怖でも悲劇でもなく、絶望そのものである。しかし、私はそれすらも掴むことができないのだ！

VI

私は、今すぐ死ぬという事はないだろう。でも私を囲うのはやはり恐怖なのか？ここに来てから私はより幸福から離れたと言える。こんな安全で自由な生活はないだろう。でもこれらは私の望むところから得られたのではない。いわば一種の強制を伴って押しつけてくるのだ。何を？それは私にもわからない。どこから？それは永遠に消されることの無い疑問符だ。

VII

私に月はなかった。ここからそう遠くない湖で昨日は何を考えていたのだろうか。いや、いかにして考えないのかを考えていたのか？湖面に映る自分の姿を見ることもできない。私の粗野な息使いのように、かき乱され沈んでいく。

私に太陽はなかった。物質的には世界を可視化している。だが、私は見たいのか？そのことに意味か欲望かなりがあるのか？むしろ光こそが闇であるのではないか？光から闇が生まれるのではなく、闇が光を演出しているだけなのではないか？

VIII

絶望は、全ての存在を受容した。かつて開かれていた彼らは、光を求め続けたのではないだろうか。彼らはしばしば暗黒から目を背けた。しかし世界の起源はその闇である。そして彼らは彼ら以外から離別した世界を構築した。そこは明るく、あまりに痛ましい領域である。なぜなら私たちにとって光は虚無なのだから。こうして失っていく事を絶望と私は考えている。

闇に身を埋め、自身を見失う。救いの光を得ることは、本当は無いのではないか？たとえその光が存在していたとしても、漆黒の闇に埋まった私の目にとって存在しえないのではないだろうか？

既に、光が投げかけられていた時代は終わったのだ。その幻影を見ることさえ許されていない。そもそも私は生きているのか？死は訪れるのか？

IX

私はそれを自ら切り開かねばならなかったはずなのだ。同時に私の理性は立ち去った。そして感情は奪われていった。残されたのは荒んだ幻想だけとなる筈だった。私は脈絡のない幻想のな

かに帰すべきだった。

私は問わねばならない。希望を持っているのか？私はその類のものは存在自体を否定してきた積りであるが、彼は私の中に存在しているのか？何か悔やむことがあるのか？

この罪の意識はどこから生じたのか？私がもがく度に縛りつける私は誰？私はここへ自らを投げ込んだのか、誰かが私の知らない内に投げ込んだのか？

私が向かうのは幻像の内側なのか？今私が残るこの場所も虚像なのか？その向こうにいるのは人間なのか？

私は最後、一つに集約されるのか？私は（正体不明だが）確かに或る二者間の喧騒を聞くのだ。そして私の精神は焼かれ、赤く熔融され、安息を奪うのだ。

私は、いつこの問いに答えがだせるのだろうか。或いは、答えがないのだとして、答えのない問いは成立しうるのか。これらの問いは、どこに向かって問いかけられているのか？